リスク社会論批判：統治性論の立場から

A Critical Examination of the Theory of a “Risk Society”: from the Standpoint of Governmentality

山 家 歩
YMAKA Ayumu

The purpose of this paper is to make a critical examination of U. Becks' theory of “risk society” from the standpoint of the governmentality approach, proposed by M. Foucault, and developed by others. The exploration of complex dynamic transformations in contemporary societies is one of the most important issues in sociology. Becks' discussion of a “risk society” makes a major contribution to this subject in terms of the emergency of global risks and the process of individualization. However, the presuppositions of his theory prevent him from fully grasping diversity and heterogeneity of this transformation. The governmentality approach provides an alternative perspective on this question.

1. はじめに

『危険社会』をはじめとする著作において展開されているウルリヒ・ベックのリスク社会論は、彼が「再帰的近代化」と呼んでいる現代社会の変容をめぐる社会学の論議に広範な影響を及ぼしている。彼は、現代社会の変容を包括的に捉えるために、古典的近代にとらわれたままの従来の社会学のあり方を更新しようと試みている。そして、アンソニー・ギデンズやスコット・ラッシュのような人々がリスク社会論のインパクトを受け止めながらそれぞれ議論を展開している。

しかし、「リスク社会」や「再帰的近代」に関するベックの議論の中には、グローバルな市場や環境リスクについては重要な見解が含まれているものの、合理性、リスク、個人化、国家へのアプローチの前提には難点が存在している。その結果、リスクや個人化の多様な側面を問題化する上で彼の議論は困難を抱えている。われわれは特に、個人化という言葉で彼が表現する諸事態（あるいはそこに見られる主体化の諸様態）に対してグローバル化の進行が及ぼしつつある諸結果に関心を有しているが、彼の議論は、両者を短絡的なやり方で結びつけてしまっているように思われる。

本稿では以上のような考えに基づいて統治性論の見地からリスクや個人化に関するベックの議論を批判的に検討することを通して、リスクや個人化を究明していく上で重要であるが、ベックの議論からは問題化されていない幾つかの論点を抽出することとしたい。

2. ベックのリスク社会論

ここでは『危険社会』や『再帰的近代』におけるベックの議論を見てゆくこととしよう。ベックによれば、1970年代の初め以来、現代社会は、産業社会からリスク社会への転換、富の分配の論理から危険の分配の論理への転換を迎え、「再帰的近代化」という近代化の

新たな段階に入っている。しかし、マルクスやウェーバー、機能主義等に見られる伝統的な近代化論は、「再帰的近代化」を十分な仕方では問題とすることはできない時代遅れのものになっている。また、ポストモダン論は、旧来の近代化論が無効になったことを指摘するが、社会が現在迎えている変容をポジティブな仕方では捉えることなく、不毛な主張を続けているばかりである。ベックは、自らのリスク社会論が伝統的な近代化論とポストモダン論の限界を乗り越えるものであると主張している[Beck 1986=1998]。

「リスク社会」の到来は、従来のような富の分配とそれをめぐる争いに加え、「リスクの生産の問題」、「リスクの定義の問題」、「リスクの分配の問題」とそれらをめぐる争いを生じさせることになる。こうした転換が生じるのは、科学技術と産業の発展、そして福祉国家の発展の結果として、物質的貧困が緩和されたことに加え、生産力の増大が近代化の副作用としてのリスクをこれまでになかったような規模で顕在化させることによるものである。そうしたリスクの例として挙げられているのは、原発事故やオゾン層の破壊など環境問題に関わるグローバルで破局的なリスクである。こうしたリスクは、工業社会や国民福祉国家における監視や保安のための諸制度によっては処理できないものとなっている。

そして、従来の近代化の過程によって対処することのできないリスクの顕在化は、例えば科学的知識による真理性の主張のように従来政治領域とは見なされていなかった主題について、公的な政治システムの外部で政治的係争を生じさせることとなる。その結果、「私的生活、ビジネス、科学、都市共同体、日常生活」といった「工業化社会において政治的なものに保護されてきた意思決定の領域」が、政治的対立に組み込まれるようになる。こうした新しい政治領域を彼は、「サブ政治」と呼んでいる。

グローバルなリスクの出現に加えて、個人化の過程の進行もまた、再帰的近代化の重要な帰結である。古典的近代化によって形成された福祉国家は、生存の保証を普遍的な形で人々に提供するが、このことは、階級や階層、核家族といったものと結びついていた産業社会の基盤を解体することになる。その結果、産業社会において、人々の不安と不確実性を克服する役割を果たしていた、「社会道徳的な環境・家族・結婚・男女の役割」等の伝統的様式が失われ、それらの桎梏から諸個人は解放される。ただし、その代償として、リスクの配分が個人の水準においてなされるようになる。

社会の個人化の進行は、「社会の危機が個人的なものとしてあらわれ、社会的なものとしては、ただ条件付きで間接的にしか知覚されえなくなる」という事態をもたらす。しかし、その一方で、個人化は、「生活状況の制度化と標準化」を伴ってもいる。解放された諸個人は、労働市場をはじめとして教育、消費、医療等に関する諸制度に依存するものであり、「『制度に依存した個々人の情況』に対する特別な管理構造」が存在している。

個人化された生活状況が同時に集団性を持つ標準化されたものであるという個人化の矛盾する側面は、「歴史的に矛盾に満ちた社会化過程として、理解される」。しかし、こうした矛盾への認識の深まりは、「新しい文化的な共同性」を生じさせることになる。この共同性は、私的なものに対する行政や産業による介入によってかき立てられる「抗議という形態と抗議の経験において形造られる」。

環境運動、平和運動、女性運動のような新しい社会運動は、危険社会における新しい危機状況と新たに登場してきた男女間の矛盾の表現と見なされる。そして、これらの新しい社会運動が「どのような形態で政治化されるか、それが安定するかしないかは、脱伝統化

され個人化された生活世界における社会的アイデンティティ形成過程に依存している」[Beck 1986=1998:143]。

個人化とグローバル化は再帰的近代化の二つの側面であるとベックは主張する。すなわち、リスク社会においては、「個人生活というマイクロコスモスは、解決が極めて困難な地球規模の問題というマクロコスモスと相互に結びついてゆく」。そして、こうした認識に基づいて、ベックは『世界リスク社会』の中の「コスモポリタン主義宣言」において国家の枠組みを超えた「世界リスク社会」の構想を示すが、この点については後で見ることにしよう[Beck 1999]。

3. 近代におけるリスクの統治の諸様式：統治性論の立場から

コリン・ゴードンも述べているように、フーコーが統治性という概念を用いるようになった理由の一つには、権力という言葉が連想させる「鉄の檻」のようなイメージから距離をおこうという意図があったと考えられる[Gordon 1991]。統治性研究以降、諸個人の主体としての振る舞いの自由、「自由の諸実践」が近代的な統治の諸様式の前提となっていることをフーコーは強調するようになる。このとき自由は両義性を孕んだものとして捉えられる。すなわち、それは近代的な統治の知や諸技術の標的であり、その産物であるという側面を持つと同時に、絶えず既存の権力諸関係を変えてゆく可能性に対して開かれたものであると見なされる。

われわれは、現在の社会変容を捉える上で統治性論の立場が有効であると考えているが、フーコーの議論を踏襲すれば現在の社会変容をただちに捉えることができると主張したいわけではない。統治性に関するフーコーの議論は断片的なものにとどまる。加えて、フーコーが統治性研究に着手した70年代末の時代状況（福祉国家の下での統治への批判が焦眉となっていた）と現在の時代状況（新自由主義が世界を席卷した後、ポスト-福祉国家の統治が問題となっている）は異なる。したがって、以下では、フーコーだけではなく、統治性論の問題関心を継承する他の論者の議論をも参照としながら、近代における統治様式の変容について見ていくこととしたい。

フーコーは、18世紀末、19世紀初頭における自由主義的統治の出現に、それまでの国家理性やポリス学の下で発展してきた統治様式との断絶を見ている。フーコーによれば国家理性は、人口の統治と主権の接合をはかる試みだった。ここでは、富と人口の最大化が追求されるが、そのことは国家の経済や軍事上の力の増大を追求することと一致するものと見なされていた。そして、この統治の合理性においては、統治は常に過小なものと見なされ、絶えざる統治の拡大が目指されていた。

それに対して、自由主義的統治は、国家から区別される固有な規則性を持つ自然な領域としての諸人口、社会、そして自律的で自由な主体の存在を前提として、それらの自律性を損なう恐れのある統治の過剰に対する批判であると見なすことができる。同時に、それは、責任能力のある、自律した諸主体の自由と、諸人口や社会の固有の規則性を最適化する統治の実践としても見なされる。すなわち、自由主義的統治とは統治批判であるとともに最適な統治術の追求の諸実践でもあるという二重性を帯びている[Foucault 1994Ⅲ: 818-824]。

18、19世紀の狭義の自由主義と区別され得る、「社会的統治」[Rose 1999]は、19世紀後

半、20世紀前半に成立することとなる。フランソワ・エヴァルドは、フランスにおいて、労働災害に関わる保険の技術が社会政策へと導入されてゆく歴史的過程を辿ることによって、この転換を解き明かしている。すなわち、19世紀の自由主義は、労働災害のリスクを思考する際に、「過失」と「責任」という法的な概念に基づいていた。それに対して、19世紀後半を通じて、労働災害の補償、(さらに失業保険、健康保険、そして老齢年金等)は、社会保険の技術によって対処されるようになる。この時、諸人口に関わるリスクの管理の様式は、「責任の社会化」に基づくものとなる[Ewald 1984]。社会保険の技術は、エミール・デュルケームやレオン・ブルジョワ等の連帯という概念と結びつけられ、社会権を実現する最適手段として、発展することとなる。こうして、「社会的なもの」を通じての福祉国家による統治、「社会的統治」が成立する[Rose 1999]。

ただし、注意しなければならないのは、後でも触れるように、保険の技術は、リスクの統治のための唯一の手段ではないということである。例えば、他の重要な手段としては、優生学等と結びついた国家人種主義が存在する[Foucault 1997]。これは、生物学的危険と見なされた諸個人、諸集団を断種等の手段によって、抹殺するものであった。それは、自由な主体の存在を前提としない非自由主義的な統治技術であるが、断種政策が合衆国やスウェーデン等の自由民主主義諸国で実施されていたことから理解されるように自由主義的統治と根本的に相容れないものであるわけではない。

全体主義による惨禍や福祉国家の危機等の経験を通じて、1970年代以降、社会的統治とは区別される統治のダイアグラムが出現することになる。ローズはこれを「進化した自由主義の統治」と呼んでいる[Rose 1999]。ここに見られるのは、国家の統治化の諸プロセスに、国家の脱統治化の諸プロセスが接合される事態である。ここでは、「社会的なもの」を素通りして諸個人や諸集団を統治する多様な諸技術(例えば会計学)の繁殖、活性化が見られる。福祉国家という比較的統一性を保った保証者による「社会的なもの」を通じての統治は、それらの知や技術の繁殖、消費者、市民、コミュニティー等の(再)活性化によって多元化される(ここで市場および擬似市場モデルが重要な役割を果たす)こととなる[Dean 1999]。年金制度の改革等に見られるように、リスク管理の社会化は後退し、その個人化や私営化が促進される。

4. リスク社会論に対する批判的検討：ミッチェル・ディーンの議論を中心に

ベックが指摘するように、核戦争、原発事故、オゾン層破壊、株式市場の暴落等、科学技術の発展と生産力の発展によって生じるグローバルなリスクの存在が現在の社会変容において重要であることについては確かであろう。また、これらのグローバルなリスクが従来政治に含まれていなかった領域を「サブ政治」として出現させている点についても同様である。これらの点で彼の議論には示唆深い内容が含まれている。そして、彼が主張するように、古典的近代の枠組みにとらわれている社会学は、現在われわれが直面している社会変容を把握し得るものに更新されなければならないだろう。

しかし、リスク社会に関するベックのアプローチの前提には、問題が含まれている。そのために、彼が提起している諸問題を考察していくうえで、彼のリスク社会論が依拠している理論的な枠組は適切ではない。

ここでは、リスク社会論の理論的な前提に対してミッチェル・ディーンが『統治性』の

第9章「リスクと再帰的統治」の中で行っている批判の中から、次の三点について見ていくことにしたい[Dean 1999: 176-197]。まず、伝統的な近代化論の合理性に関する理解をベックが共有している点である。次に、彼がリスクを均質的な実在と見なしている点である。最後に、「ポスト-リスク計算社会」としてのリスク社会におけるリスクの増大が個人的、集団的アイデンティティー編成を決定づけているという実在論的な考えを彼が取っている点である。ディーンにとってベックに対する批判がなされるべきなのは、ベックの拠って立つこれらの諸仮定が間違いであるからというよりは、リスクや個人化の分析の役に立たないからである。以下では、この三つの問題についてのディーンの議論をわれわれの問題関心に基づく形で再構成しながら、より詳細に見ていくことにしよう。

まず、第一の点に対するディーンの批判を見る。「科学的知識の問題のない有効性という仮定について異議を唱え、そして真理に関して、抗争と分裂を強調する」にもかかわらず、ベックは、ウェーバーやフランクフルト学派の人々と同様に、「矛盾を含んではいるが本来的には統一体をなすべきもの」として合理性を理解する伝統的な立場にとどまり続けている。こうしたベックの合理性の捉え方に対して、ディーンは、フーコーとともに理性の分散した諸形態の特殊性を具体的に捉えることの重要性を主張する。

「合理化の諸過程の弁証法的な統一へと向かう傾向」を捉えようとするベックの立場は、リスクを均質的なものとして捉えようとする考えと結びついている。これがベックの議論が孕む二番目の問題点である。彼はリスクを保険の数量的リスクに還元してしまう[Beck 1994=1997]。この結果、「ポスト-主義」の不毛性への正当な批判にもかかわらず、結局のところ、彼の言う「リスク社会」とは、リスクの量的増大の帰結としてリスクの計算が不可能になった「ポスト-リスク計算社会」に他ならず、彼の議論は彼が脱しようとしている「ポスト主義」を克服し得てはいないとディーンは批判する。

リスクの統治に関わる技術は、保険技術に限られるものではない。ベックの考えとは異なり、リスクに関する保険の量的な計算合理性は、リスクの全てを網羅し尽くすものではない⁽¹⁾。リスクは、飲酒や喫煙、自動車事故、医療事故から地域紛争やテロ、株式投資、自然災害に到るまで多種多様な事柄に関わっており、異なった知やテクノロジーの組み合わせに関わる互いに異質なものの「寄せ集め(asmontage)」[Rose 1996]である。

リスクに関する議論においてディーンが依拠しているエヴァルドによれば、リスクとは、計算不可能なものを可能にする「計算的合理性」のとりうる多様な形態の一つ、「様々な出来事について考えそれを表象する一つの方法」に他ならない。それはカント的な意味でのカテゴリーのようなものである[Ewald 1984]。

そして、保険の技術について重要なのは、「そもそも損害（親指や両親の喪失のような）は金では計算できない」し、補償金が苦しみを「埋め合わせる」わけではないが、それにも関わらず保険というパースペクティヴから見ると、特定の手続きを通じて、補償が可能になるということである。したがって、保険リスクに関わる諸実践とは、「むしろ計算不可能であると感じられているもの、値段がついていないと理解されているものを、計算や貨幣による補償に従うようにしようとする努力」と考えられるべきなのである。

このように考えるならば、ベックのような仕方では、「計算不可能なリスク」について語ることはできないし、そもそも、合理性一般とリスクの合理性を同一視することもできない。ベックが主張するような破局的な事態をもたらし得るグローバルな環境リスクや市場

のリスクの出現は確かに重要ではあるとしても、「ポスト-リスク計算社会」についての彼の語りは、リスクに関わる事態の複雑さを見えなくさせてしまうだろう。

ある統治のプログラムの失敗について言及することはすでに特定の認識論的な枠組みを前提としている。ベックの考えとは異なり、失敗はその統治のプログラムの放棄に直結するとは限らない。むしろ失敗を発見することはしばしばそうしたプログラムの洗練を促すものとして働く。例えば、アメリカの化学産業の一部では、破局的な事故によるリスク管理の失敗を通じて、最悪の事態に関するシミュレーションをも念頭に置いた包括的なリスク管理が進められつつあることをディーンは指摘している。また、こうした最悪の事態の想定は地震や台風等の災害に対するリスク管理の改革についても見ることができるだろう。

そこでは、損害の可能性とその補償費とが計算され、取るべき対策が決定される[村上 1998]。それに対して、近年日本でも関心の的となっている少年犯罪の厳罰化についての議論においては、少年犯罪というリスクの管理の失敗に関する認識が規律的な矯正や正常化の戦略から排除や隔離の戦略へのシフトを部分的には伴っていると考えられる [Rose 1999]。こうしたリスク管理の失敗をめぐる問題は、「ポスト-リスク計算社会」についてのベックの語りからは問題とすることができない。

環境に関わるリスクについて重要なのは、ベックのようにそれを彼の言う「リスク社会」においてリスクが帯びる普遍的な特徴であるかのように述べるのではなく、「仮に現況を将来に外挿したときに予想される最悪の経緯を、今後の経過がたどると仮定すると、われわれの将来の子孫たちの安全性が著しく脅かされる可能性がある、という論理が働く」[村上 1999]といった環境に関わるリスクの種差性を明確にすることである。

最後に、ベックに対する三つ目の批判として、個人化に関する批判を見ることとしたい。ただし、ここでのディーンの議論は、十分なものではないので、彼が別の箇所で行っている議論や他の論者の議論をも参照しながら、検討していくこととしよう。

すでに見たように、ベックは、福祉国家＝産業社会からそれによっては管理することができないグローバル化した計算不可能なリスクに見舞われた「リスク社会」へのシフトとして「再帰的近代化」を物語る。そして、リスク社会の下での「事実」としてのリスクの量的な増大、計算不可能性によって生じる広範な「社会的、文化的変質」の帰結として、彼が個人化と呼ぶ主観性やアイデンティティーの諸形態の変化も生じることになるとする。

しかし、スコット・ラッシュ等も指摘しているように、個人化を「再帰的近代化」によって、古典的な近代の拘束から人々が解放されたことの帰結と見なすベックの主張は、事態の半面しか見ていない [Lash, et al. 1996]。つまり、ベックが個人化として捉える事態は、統治性論者達の言葉で言う、「進化した自由主義の統治」[Rose 1999] と結びつき、それによって促進される主体化の諸実践、それらの接合の産物という側面を持っていることが見落とされる。そして、個人化を「個人への実質的な『自由への強制』の始まり」として実体化して捉えてしまうことになる[中野1999]。その結果、彼の議論は「こうした過程を押し進めている社会的矛盾と強制を考察から体系的に排除」するものとなっている [Hirsch 1995=1998]。

以下では、グローバルな市場リスクと個人化の関係に関する統治性論の議論を見ていく

ことで、ベックの議論を位置づけ直すこととしよう。「進化した自由主義の統治」における経済の統治のシフトは、経済に関する知覚の変容と結びついている。国民国家の領土内で組織された、相互に利益をもたらす国際貿易に参加する自己調節的な国民経済という知覚は、資本主義的な「立地点確保」をめぐる熾烈なゼロサム競争において、諸国、諸地域、諸都市を勝者と敗者に振り分けるグローバル経済という知覚に大幅に取って代わられる。加えて、国家による経済の統治は、しばしば、IMF、世界銀行、WTO、EU、のような国際機関による直接的ないし間接的な拘束を受けるようになる。

グローバルな市場のリスクに対応する経済政策を可能とする技術的手段が欠如しているために、国家による統治は、他国に対して相対的に競争力を向上させることしか期待することができない。そして、国家の責務はもはや国民全体の経済的利益を安全保障するために自己調節的な国民経済をマネジメントすることにはない。それは、他国民や地域に対して経済的なパフォーマンスを向上させるために諸個人や諸制度の競争力を強化し、市場化を促進することである。そして、この目標のために競争力のない公的セクターの企業化、私営化、労働組合の弱体化、労働市場の規制緩和、税の軽減、雇用形態のフレキシブル化等の諸政策がなされる。

社会的な統治においては、ケインズ主義的政策と福祉国家政策とによって、経済的なものと重ねあわされた社会的なものを通じて、貧困、失業、不平等といったリスクの管理がなされていた。しかし、今や経済的なものと対立すると見なされるようになった社会的なものは、諸個人、家族、会社、様々な組織、コミュニティへと解体されることになる。雇用のフレキシブル化が促進される状況において、この不確実性（これは同時に利益を得るためのチャンスとしても見なされる）に向き合いながら自分自身の「経済資本としての能力」を生涯設計として強化しようとするメンタリティーが、諸個人が雇用を探したり維持したりする上でも、国家の競争力の向上にとっても必要なものとして促進される。この時、諸個人の自由は、欠乏からの自由ではなく、個人的な活動を通じてのみ得ることのできる自己実現の能力と見なされるだろう [山家 2001]。こうして諸個人は各々があたかも企業であるかのように振舞うこと、自己の「企業化」を求められることになる [Rose 1999]。

以上の事柄について重要なのは、国家による管理の限界を今や超えるに到り、諸個人が直接向き合うことを余儀なくされたりリスクの量的増大が科学技術や産業の発展によって引き起こされたという「事実」であるよりも、責任の社会化を通じてリスクを管理する社会的統治からパット・オマリーがnew prudentialismと呼ぶ自己責任の原理に基づくリスク管理の個人化と私営化を促進する「進化した自由主義の統治」へのリスクの統治戦略のシフトが生じているということであり、それが諸個人の日常生活における諸リスクの増殖と結びついているということである [O'Mally 1996]。この新しい統治戦略においては、適切な仕方で自己の自由を行使し、自己が対面する不確実性に対処するための諸個人のエンパワーメントを促す介入がなされるようになる。

加えて、「進化した自由主義」の体制のもとでのリスクの統治のシフトをベックのような仕方で個人化という局面に限定して理解することはできない。例えば、現在薬物中毒患者に対する対応策として、自助グループが重要性を増していることが端的に示しているように、「進化した自由主義」の体制の下で、リスクの統治の多元化された担い手として、

現在、諸個人だけではなく、特に医療や犯罪等に関して様々なコミュニティーが重要性を増してきていることに注意が払われるべきであるだろう⁽²⁾。コミュニティーは、アメリカのコミュニタリアニズム、市民社会論、ニューレイバーのような「第三の道」を唱える中道左派によって、新自由主義の「市場万能主義」に対する批判という文脈から様々な形で取り上げられている。しかし、渋谷望が指摘しているように、それは何よりもまず責任能力のある自由の主体としての諸個人からなる「道徳的共同体」であり、ネオリベラリズム的な「リスク管理の責任主体」にやすやすと接合し、またこれを補強しさえする」点で「ネオリベラリズムの市場原理の『貧困』を補うためというよりは、むしろ市場原理のいっそうの貫徹のための原理を供給する」重要な手段を提供するものである[渋谷 1999]⁽³⁾。

また、諸個人の自由の主体としてのエンパワーメントを促進するこの統治様式は、アクティヴな市民的主体とそうした主体たり得ないと見なされるドラッグや犯罪、そして失業のようなリスクに関わる特定の人口（合衆国における黒人はその端的な例である）とを分割するとともに、エンパワーメントされるべき人々をもはや規律化による矯正を通じて同化しようとはせずに、排除し、周縁化するようなより低コストな戦略へと向かっている[Castel 1991]。ローズは、アメリカの特殊性について留保しながらも、こうした排除と周縁化が、犯罪化という抑圧的な形で管理されるアメリカの傾向が統治の新たなダイアグラムとして重要性を帯びてきている点に注意を促している[Rose 1999]。

以上のようなリスクの管理におけるコミュニティーの重要性や排除に関わる問題は、ベックの個人化についての議論においては考慮されない。排除の問題については、次章で、『世界リスク社会』や『グローバリゼーションとは何か』といったベックの近年の著作において展開されている世界リスク社会論が抱える問題について検討することを通じて再び取り上げることとしたい⁽⁴⁾。

5. グローバルリスク社会論の陥穽

『世界リスク社会』に収められた「イントロダクション：コスモポリタン宣言」の中で、ベックは、近代化の新たな段階が、グローバリゼーション、個人化、ジェンダー革命、失業の増大、グローバルなリスクといった密接に結びつく五つの過程からなるとしている[Beck 1999: 1-18]。これらの過程は、古典的な近代化を特徴付ける「集約的な生活パターン、進歩、コントロール可能性、完全雇用、自然の搾取」を堀崩しつつある。

また、『グローバリゼーションとは何か』の中では、グローバル化した市場によって引き起こされる危機が議論の主要な対象に加えられる。ここでは、19世紀の階級の問題に相当する21世紀への転換期の問題は、グローバリゼーションの問題であると述べられ、市場の万能性を主張するネオリベラリズムのイデオロギーへの批判の必要性が主張される[Beck 1997=2000]。

ベックは、グローバリティーやグローバリゼーションと、グローバリズムの区別の必要性を強調する。グローバリズムは、グローバリティーやグローバリゼーションの孕む多様性を世界-市場システムに還元してしまおうとする新自由主義のイデオロギーであるとされる。この市場主義的なイデオロギーは、環境や市場に関わるグローバルなリスクの問題に対応しえず、それらを悪化させるものである。それに対して、グローバリティーが意味するのは、国民国家等の「閉じた空間」に閉じこもることがもはや可能ではないという意

味において、「われわれが、世界社会に暮らし続けている」ということである。この世界社会は、「統一なき多様性」として認識される。また、グローバリゼーションは、主権や国民国家が危機を迎えるプロセス、世界国家も世界政府もないプロセスであるとされる。グローバリティーに関するベックの主張の要点をなすのは、それがエコロジー、文化、経済、政治、市民社会という互いに相互依存してはいるが、互いに還元されえない論理からなっているという点である。それは、20世紀末の「人間のインターコースの避けられない条件」とであるとされる。

このグローバリティーの状況においては、いかなる局所的な出来事も、限定されたものではありえず何らかの形で世界全体に影響を及ぼす。したがって、人々の生活、活動、そして組織は、「ローカル・グローバルの軸」に従って再構築されなければならない。したがって、こうした状況に見合った形での政治の再発明が必要であるとされる。「サブ政治」は、「グローバル・サブ政治」として捉え直され、国際的な諸制度の発展による上からの民主主義のグローバリゼーションと補完的な国境を超えた下からの民主主義のグローバリゼーションを押し進めるものと見なされる。

市場とは区別される、「世界市民権」の場としての、「世界リスク社会」こそが、国民国家を超えるとともに、グローバリゼーションの圧力に抗い得る拠点であり、そして、ボランティア組織の活動および発展がその建設において重要な役割を果たすとベックは主張する。こうした議論は、グローバル市民社会論 [Keane 1998] や「第三の道」に関する議論でなされているものと同様のものである。

以上のようなベックの世界リスク社会論について次のように言うことができるだろう。ベックは、従来の社会学が囚われてきた国民国家の枠組みを超える必要性を主張しているにもかかわらず、国家と市民社会を対立的に捉える伝統の中に依然としてとどまっている。より正確に述べるならば、彼は、一方で国家/市民社会の対立に関する伝統的な見解を無批判に自らの議論の前提としておきながら、他方で「世界リスク社会」の発展によるその対立の克服こそ、近代の新たな段階に見合ったものであると主張している。その際には、リスクの統治戦略のシフト、それと結びつく国家の機能の変容が問題とされることはない。というよりは、この点についても、彼の議論は「こうした過程を押し進めている社会的矛盾と強制を考察から体系的に排除」するものとなっている [Hirsch 1995=1998]。

ここではアダム・スミス以来の市民社会論の系譜に言及する余地はないが、ベックの世界リスク社会論は、批判の特権的な根拠としてグローバル市民社会や市民的諸主体を理想化する結果、市民社会内部や市民的諸主体が孕み得る問題を軽視するという、伝統的な市民社会論の欠点を再生産することとなっている。この時、個人的なものであれ、集団的なものであれ、市民的な主体の「アイデンティティー形成過程」は、その過程自体に錯綜した抗争関係を伴うものというよりも、調和的な性格のものと見なされることになる。

重要なのは、こうしたことがベックのリスクに関する理解と結びついていることである。ジグムント・バウマンが指摘しているように、ベックは、グローバルなリスクをめぐる紛争に言及してはいるものの、結局のところ、それが富とは異なり、万人に共通にふりかかる、「平等主義的」で、「民主主義的」な特徴を持っており、調和ある共同性をもたらすものであることを強調することによって、それが各人にとって多様な意味を持ちうること、また、それをめぐって生じる社会的対立が複雑なものでありうることを軽視することにな

っている [Bauman 1993]。ベックは、グローバルなリスクが有する「平等主義的」で、「民主主義的」な特徴が「統一なき多様性」としての「世界リスク社会」において自由主義における市場のような「見えざる手」として働くことを期待している。だが、環境リスクにしても、万人に共通に降りかかるという「平等主義的」で、「民主主義的」な特徴よりは、国内外の「南北問題」と結びつく形で、その再分配が不平等な形でなされていること、そのことが深刻な対立を生じさせていることが顕在化しており、このリスクから調和ある共同性がたち現れていると考えるのは楽天的過ぎるのではないだろうか。なされるのは、諸利害の深刻な対立の中での絶えざる交渉以外ではないだろう。国境を超えた下からの民主主義のグローバリゼーションの果たし得る重要な役割もこの交渉の過程の多元化にあるのではないだろうか。

ベックにおいて、グローバルなリスクに内在する「平等主義的」で、「民主主義的」な特徴が「世界リスク社会」における共同性を生じさせるという調和的な考えは、コスモポリタンの市民的主体やアイデンティティーの構成過程においても、その「構成的外部」[Mouffe 1993=1998]の排除とそれをめぐる抗争とがリスクの統治の戦略と結びつく形で刻み込まれていることを見えなしてしまう。さらに悪いことに、そのことは、実態としての市民社会における「構成的外部」の排除を問題化する契機を彼の言う「サブ政治の領域」から排除することに結びついている。

前章でも見たように、「世界リスク社会」における共同性を立ち上げるグローバルなリスクの特徴の強調は、ベックにおいては、それとは異質な、排除や周縁化と結びつく諸リスクの統治の諸形態を問題化することの妨げとなるものであった。様々なリスクの繁殖は、リスクの管理の個人化と私営化を促進し、こうしたリスク管理をなし得ないと見なされる諸個人や諸集団を非道徳的な存在として排除し、周縁化する「進化した自由主義の」統治戦略と結びついている。「事実」としてのリスクの量的増大とベックが同一視する様々なリスクへの知覚の鋭敏化によって生じる市民の安全性への要求の増大は、それが警察をはじめとする諸権威による「ポリス的」介入の増大への要求とも結びつくものでもあるという点で、両義性を帯びざるを得ない。そして、この両義性は、西ヨーロッパにおける移民問題が示しているようにグローバリゼーションの重要な側面をなすグローバルな規模での出来事のローカルなレベルへの侵入が進展することによって先鋭化し得るものである。

理想化されたコスモポリタンの市民的アイデンティティーの強調は、その「構成的外部」をなすポリス的介入の標的とされる「uncivil」なアイデンティティーを持つ人々のより一層の隔絶化と結びつき得る。市民的アイデンティティーの構成において、「構成的外部」の役割を果たす犯罪者、ドラッグ常用者、外国人等、自らの自由を適切な仕方で行使し得ないと見なされる「uncivil」な人々を、厳罰化された予防的措置として拡大される「ポリス的」介入は主要な標的とするだけに、その調和的な側面ばかりを強調することによってコスモポリタンの市民的アイデンティティーの滋養やグローバル市民社会の発展を問題解決の拠り所と見なすことは、不十分であるばかりか、危険ですらありうるだろう。ベックが主張するような市民社会や市民的主体の道徳的強化とは別様の配慮が必要である。

こうした理由から、ウィリアム・コノリーのアイデンティティーに関する議論にならって、「市民的アイデンティティーの過剰」が孕み得る危険性についても配慮をすることが

重要であるとわれわれは考える。コノリーが指摘するように、グローバリゼーションの趨勢は、国境を越えるデモクラシー、「アゴニズムの精神を注入されたデモクラシー」の可能性を開くとともに、集合的アイデンティティーのドグマ化、閉塞化への危険を孕んでいると考えられるのだから。ベックの言うコスモポリタンの市民的アイデンティティーだけが閉塞化の危険を免れていると考えることはできないし、そのように装われていること自体が閉塞化の兆しであると言い得るのではないだろうか。

グローバリゼーションによって、地球規模の連帯というユートピア的次元を含む政治的プログラムの可能性がグローバル市民社会において立ち現れているとしても、そのことが同時に新たな統治戦略と結びつくポリス的介入への可能性を開くものでもある現在、国家と市民社会の関係についての伝統的な見解それ自体を再検討した上で、現在の国家や社会の変容がいかなるものであるのかを、ユートピアを語ることによってそのネガティブな側面を糊塗することなく明らかにしてゆくことの重要性は増大しているだろう。

6. 小活

これまで見てきたように、「再帰的近代化」や「リスク社会」に関するベックの議論には難点が存在する。社会的統治をリスクの社会化による統治様式と捉える統治性論の立場からすれば、福祉国家＝産業社会もすでに「リスク社会」に他ならない。この点で、産業社会からリスク社会へのシフトを語るベックの議論はミスリーディングなものである。重要なのは、リスクの増大を与件と見なすことではなく、特定の仕方でリスクを問題化するリスクの統治様式の種差性を究明することである。また、個人化を古典的近代の拘束からの解放の帰結とするベックの主張は、「自らの本質として意味付与の能力を備え持つ主体としての人間存在の連続性」を前提している。だが、自己に関するわれわれの経験は、ベックが考えるよりもはるかに、多様で、異質なものの「寄せ集め (assemblage)」として構成されており、個人化とはそれらの絶えざる結びつけの、抗争を含んだ、複数の過程であることが注意されなければならない。それゆえに、ベックの言う「サブ政治」は、抗争を含む錯綜した主体化やコミュニティ編成の諸過程を、より積極的な仕方で問題化する可能性をも含むべきであるだろう。

注

- (1) ここでは、紙幅の都合上もあって、具体的内容に言及する余地はないが、ディーンは、「保険のリスク (insurance risk)」の他に、「疫学的リスク (epidemiological risk)」、「ケース・マネジメント・リスク (case-management risk)」、「臨床医学的リスク (clinical risk)」が存在すると指摘している。しかし、それらにしてもリスク合理性の全てを網羅するわけではない[Dean 1999: 189-191]。またリスクについてはエヴァールの議論をも参照せよ[Ewald 1984: 173-181]。
- (2) 薬物中毒者のような人々の自助グループは、統治の新たな経路であるとともに、彼等が対抗的な自己物語を獲得する場でありうるという両面性を持っている。
- (3) 従ってまた、問われなければならないのは、この点についても渋谷が述べているように、新自由主義とコミュニタリアリズムや「第三の道」の間に想定されている「対立」ではなく、「共犯関係」である[酒井&渋谷 2000]。それらの「対立」の強調は、「進化した自由主義の統治」において、「もはや経済的主体と市民のパトリオティックな義務の間に紛争は存在していない」[Rose 1999]ことを隠蔽するものである。
- (4) 排除には包摂のプロセスに組み込まれる内的な排除とこのプロセスからも排除される外的な排除の

二つがあるが、本稿では後者を問題としたい。

主要参考文献および引用文献

- Bauman, Z. 1993 *Postmodern Ethics*, Blackwell.
- Beck, U. 1986 *Risikogesellschaft : Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag. =1998東廉・伊藤美登里訳『危険社会：新しい近代への道』法政大学出版局。
- Beck, U. et al. 1994 *Reflexive Modernization : Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity PRESS. =1997松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代：近代社会における政治、伝統、美的原理』而立書房。
- Beck, U. 1997 *Was ist Globalisierung?* Suhrkamp Verlag. =2000 Camiller, P(trans.)
What is Globalization? Polity Press 2000.
- Beck, U. 1999 *World Risk Society*, Polity Press.
- Castel, R. 1991 “From dangerousness to risk”, in Burchell, G (ed.) *The Foucault Effect : Studies in Governmentality*, The University of Chicago Press.
- Connolly, W. 1991 *Identity / Difference : Democratic Negotiations of Political Paradox*, Cornell University Press. = 1998 杉田敦・斎藤純一・権左武志訳『アイデンティティ/差異：他者性の政治』岩波書店。
- Dean, M. 1999 *Governmentality*, SAGE Publication Ltd.
- Ewald, F. 1986 *L’Etat providence*, Grasse.
- Foucault, M. 1994 *Dits et ecrits III IV*, Gallimard.
- Foucault, M. 1997 *Il faut defendre la societe*, Gallimard.
- Gordon, C. 1991 “Governmental Rationality : intoroduction”, in Burchell, G. (ed.) *The Foucault Effect*, The University of Chicago Press.
- Hirsch, Y. 1995 *Der Nationale Wettbewerbsstaat*, Edition ID Archiv. =1998木原滋哉・中村健吾訳『国民的競争国家』ミネルヴァ書房。
- Keane, J. 1998 *Civil Society : Old images, new visions*, Polity Press.
- Lash, S. et al. 1996 “Introduction : Ecology, Realism and the social Sciences”, in Lash, S. et al. (ed.) *Risk, Environment & Modernity*, Sage.
- Mouffe, C. 1993 *The Return of the Political*, Verso. =1998千葉真他訳『政治的なものの再興』日本経済評論社。
- 村上陽一郎 1998『安全学』 青土社。
- 中野敏男1999「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」現代思想 Vol.27-5 青土社。
- O ‘Mally, P. 1996 “ Risk and Responsibility”, in Barry. A (ed.) *Foucault and Political Reason: Liberalism, Neo - liberalisme, and rationalities of government*, The University of Chicago Press.
- Rose, N. 1996 *Inventing our Selves : Psychology, Power and Personhood*, Cambridge University press.
- Rose, N. 1999 *Powers of Freedom: reframing political thought*, Cambridge University press.
- 酒井隆史&渋谷望 2000「ポストフォーディズムにおける＜人間の条件＞エートス政治と『第三の道』」現代思想 vol.28-9.
- 渋谷望 1999「＜参加＞への封じ込め」現代思想 Vol.27-11 青土社。
- 山家歩 2001「自由の転位」『社会研究』vol.31 法政大学大学院社会学専攻委員会。

(法政大学博士課程後期)